

## お寺と太鼓

今年のお施餓鬼会には太鼓が登場いたしました。ご参詣下さって、実物をご覧になった方は普通の太鼓と異なった姿にさぞや驚かれたと思います。お寺で使用する太鼓を宮太鼓といいますが、もちろん、宮太鼓はごく普通の胴長太鼓です。また、お寺では太鼓を法鼓（ほうこ）と呼んだりしますが、特別な形を指すものではありません。昔、松林寺の北隣に地車の車庫があり、地車の太鼓を、普段、本堂の軒先に揚げて預かっていました。子供の頃から間近で見て、太鼓とは大層大きいものだという実感が、本堂に置く場所があるだろうかという疑問につながり、太鼓を新調することができませんでした。しかし、たまたま、日本で和太鼓生産量一位を誇る浅野太鼓店の案内を見る機会があり、和楽器としては異例の **G** マーク選定を受けた『月鼓』という太鼓に目を奪われました。和太鼓の組太鼓で演奏会のステージの中心に置くために開発



された団扇太鼓型のユニークな太鼓で、胴が無くとも同径の太鼓と同じ音が出るという説明と松林寺の本堂のスペース、「月鼓」と元祖法然上人の宗歌「月影」との連想。月面に浄土宗の宗紋である「月影杏葉」（つきかげぎょうよう）を入れてみればと、アイデアが湧いてきて、本堂を建てた松井建設と同じ加賀前田家のお抱えというのも何かの因縁かと思いつつ浅野太鼓店に相談しましたところ、思いをそのまま実現して頂くことができました。



さて、浄土宗で使用する太鼓は2種類あります。懺悔太鼓とも呼ぶ平太鼓は、葬儀式に役僧が肘の上に載せて引きずるような音で打ちます。もう一つの宮太鼓は法要の始まる合図に使用されるとされています。また、仏教では太鼓の音そのものが、雷鳴を表すともいわれます。

仏教全体を見渡すと、最も太鼓も含めて楽器が大きな音量で活躍する法要はチベット仏教のそれだと思いますが、我が国でもよく知られるお経の『チベットの死者の書』の第一巻第二章「チョエニ・バルドゥ

(存在本来の姿の中有)」に、我々が死後、中陰の間に経験するかも知れぬこととして、すべての存在本来の音が、千個の雷鳴のように一斉に鳴り響きますが、これは自身の投影であり、意識の働きであるので、恐れたり逃げ出したりしてはならないと説かれております。人は生身の肉体があるときは五官の働きで世界を認識していますが、死後、肉体を離れて意識のみとなつて、目を通さず仏を見れば余りの強烈な光に恐れおののいたり、耳を通さず雷鳴のような音におびえたりと、仏国土に慣れるのは大変そうですが、チベットに限らず、お寺の法要で、金色に輝く仏様を拝み、雷鳴のような太鼓の音に馴染むことも、お浄土に往生するとき、何者をも恐れず、ひたすら真つ直ぐに、阿弥陀様を目指して、白道を進む勇気を与えられることに通じようかと存じます。

